
閉鎖空間

闇友菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉鎖空間

【Nコード】

N6718E

【作者名】

闇友菜

【あらすじ】

小夜は母親に連れられて市立采明病院精神科病棟に入院してきた、躁鬱病の患者。病棟には、悪魔の呪いと呼ばれる噂があった。サヨという少女がかつて病棟で変死を遂げて以来、囁かれるようになった噂が……。怨みと怨みが交錯する作者初のホラー。夏ホラー2008百物語編参加作品です

00 入院（前書き）

夏ホラー2008参加作品です。

ホラー初挑戦で手探り状態ですがよろしく願いします!!

00 入院

白い白い壁だ。窒息しそうなくらい。

「思ったよりもずつと静かで、綺麗なところじゃない。良かったね、小夜」
小夜

何が良かったのかわからないが、母が笑顔で私を振り返った。

この人は、私をここに連れてきたことに罪悪感を感じている。

顔に張り付いた笑顔は、家では見たことのないものだった。作った笑いは不気味だ。

笑っているのに笑っていない目元。

隈の上に無理やり塗ったくっであるファンデーションが汚い。

私は一言感想を漏らした。

「白くて、不気味」

「清潔感があつていいじゃない？ 看護師さんだつてほら、優しそ
うだし……」

「清潔感？ どこが……」

私は自嘲気味に呟いた。

入院担当の看護師が私と母を連れて病棟内を案内する。

「病棟の外には原則として出られません。ご家族の方も面会の制限をする時もありますので、ご了承下さい。病棟に入る際には、入り口にあるインターホンを押して下さい。スタッフが受け答えます。それから、買い物はヘルパーが代わりに行くことになります。何か欲しいものがあつたら……」

看護師が入院に際しての説明をしていたが、右から左へ全て抜き取られていくようだった。何も考えられない。

そうじゃない。考えても、全部消えていってしまっただ。

「ピアノや卓球台なんかもあります。自由に使っていただいて結構ですよ。気分転換にもなりますから」

それまでの霧がかかったような感覚が嘘のように、意識が覚醒した。ピアノという言葉にそれほど惹かれた。

完全防音の部屋。

私の音だけの部屋。

ピアノを弾いているときはあの声も聞こえない。

「それから、荷物を拝見させていただいてもよろしいですか？ 場合によってはお預かりすることもあります」

看護師はにこやかに私の荷物を取り上げた。私はまだいいなんて言っていないけど、仕方ない。今日から私はこの閉鎖空間で生活することになる。

市立采明病院の8階、精神科病棟。出入り口は3つ。そのうち患者家族が出入りできるのは正面の出入り口一つ。病棟スタッフが持っている鍵でしかこの扉を開けることができない。

私は、病気なんかじゃない。

躁うつ病。私はそう診断された。

だけど、私はうつなんかじゃないし、こんなところに閉じ込められる覚えがない。

リストカットしたのは死にたかったからじゃない。

自分の存在を確かめるために傷つけていた。この腕につけられた細い幾つもの傷跡は生きたという証だ。

駄目で取り得がない私だけと生きていると感じられる。

「これは預かっておきますね」

鏡、かみそり、それからベルト。看護師が次々と凶器となりそうなものを取り上げていく。

手元に残ったのは日記帳とシャーペンだけだった。看護師はシャーペンを取り上げようとしたが、ためらってやめた。

こんなもので自傷行為すると思われるのだろうか。そんなことするわけじゃないじゃないか。

何か足りないと思ったら、この病棟にはカーテンがない。

病室は4人部屋だった。どうせなら個室の方がいいと思ったけど、部屋には私を含め2人しかいなかった。

同室の女は何もない空間を見つめながらいきなり笑い出している。カーテンのかわりにスクリーンがあるけど、それじゃ少し頼りない。

どうしてこんな病棟に入院してきてしまったんだろう。
私をここに連れてきた母親を心底怨んだ。

ここに来たって、声が聞こえるには代わりない。いくら閉鎖空間でも、あの声は私を追ってくる。

「ねえ、ペン貸して」

深夜1時。うつらうつらしていた私に、ぼそぼそと耳元で囁く声があった。暗闇の中で二つの目が光る。私のベッドサイドの床で、同室者芹沢がしゃがみこんでいた。それまで少しでもあった眠気は吹

っ飛んだ。私はびびりながらも頷いた。

芹沢が、にひひと不気味に笑った。

「何してるの……？」

「呪いを跳ね返してる」

「呪いつてなんのですか……」

「いいこと教えてあげる。この病棟は悪魔に呪われてるの。でもね、私の守護天使様が呪いを跳ね返す呪文を教えてくれるの。その呪文を貴方にも教えてあげる」

は？

と、私は聞き返したくなった。

何を言ってるんだか全くわからない。

芹沢は暗闇の中で耳に手を当て何かの音を聞いていた。時々頷きながら、彼女は笑っていた。

「明日、明日来るって」

「何が……？」

芹沢は、それまでにやけていたのに、私が質問したら急に真顔になった。

「サヨ」

01 サヨ

「サヨが来たらどうなるの？」

芹沢はいきなり黙って無表情になった。

* * * *

采明病院にサヨという少女が入院していた。病名は躁うつ病。入院期間はたったの一週間。それは、彼女が入院中に死亡退院したからである。

死因は不明だ。その頃はカーテンがあったから、カーテンで首を絞めて自殺したんだというものもあった。だが彼女の首には何の痣も見付からなかったそうだ。自殺かどうか分からない。

サヨは二人部屋に入院していたが、そのときは一人で病室を使っていた。個室同然の部屋だった。彼女が死んだ時もサヨは一人だった。

彼女の爪は全て剥がれていた。彼女が自分ではいだのか、誰かにがされたのかは分からない。ただ、サヨはよくピアノを弾いていたそうだ。そんな彼女が自分の爪を剥がしたりするだろうか。そして、両目は潰れていた。謎の変死をとげ、サヨはこの病棟から姿を消したのだった……。

それからだ。この病棟は悪魔に呪われていると噂されるようになったのは。

* * * *

「サヨの部屋に入ったものは一週間後必ず死ぬ。死ぬ前にはピアノの音が聞こえるらしい。」

「なんですかそれ。なんかの都市伝説ですか？」

「サヨの呪いってやつ？ 代々、この病棟に伝わってきた噂よ。新卒の初深夜勤務前に教えるのが伝統なの」

今年卒業し、自ら希望して精神科配属になった私 飯田あずみはあからさまに嫌な顔をした。

「私、その手の話は苦手なんですけど」

「大丈夫大丈夫。みんな乗り越えてきたことだから。暑いでしょ？ 暇でしょ？ 涼しくなるじゃない？」

冷房ががん効いている病院において、ただでさえ死者が出やすいこの場所において、涼しさはこれ以上求める必要はないと思う。「こつというの苦手な人間にとっては涼しくなるどころか凍りつきますよ」

「ほら、でも心の準備ができるでしょ？ あずみちゃんも深夜始まるんだし。サヨの呪いは皆当たり前になってきてるからいいけど、初めてだとびつくりする人多いからね」

「当たり前になるくらいずっと前からあるんですか？」

「そうね……私今年で5卒になるけど、私にサヨの話を教えてくれた人も5卒だったような……。十年も前からあるのねー、凄じやないの、サヨ」

先輩看護師は楽しそうだ。

「明日はサヨが来るわね。新卒が初めて深夜勤務に入るといつもくるの」

「どういうことですか……？ ていうか、サヨが来るとどうなるんです？」

あまり聞きたくなかったが、一応聞いてみた。

「サヨが来るとサヨの部屋に行けるようになるの。出入り口から一番遠い病室あるじゃない？ 二人部屋の。あそこ、いつも鍵が渋すぎて開かないんだけど、サヨが来ると開くのよー」

「そんなSFちつくなことあるわけじゃないですか。仮にも医療者なんですから、ふざけないで下さい」

「じゃ、今から行ってみる？ でも入っちゃだめよ。あの部屋は。入るとサヨに呪い殺されるらしいから」

「そこまで言われて入ろうと思うほど馬鹿じゃないです。いいからさっさとラウンド行きましょう」

冷房の効きすぎた病棟は、夏だというのにカーディガン羽織って丁度いいくらいだった。

初めての夜勤で、少しあくびが出そうになるのを堪えて先輩看護師と左右に分かれた。

私は出入り口から一番遠い部屋。先輩は出入り口の部屋。

時々、出入り口ですつと扉が開かれるのを息を潜めて待つ患者がいるらしい。そういう患者の対処は先輩の方が慣れている。それにナースステーションから遠ければ遠いほど、状態は落ち着いている患者だ。私はそっちの患者をまかされたわけだ。

一つ一つの部屋を懐中電灯で照らしながら回っていく。

いつも大暴れする抑制帯をつけた患者が、夜は別人のように大人しい姿を見るのはおかしかった。

人数をはじから数えていく。確か、30床中、空床15。患者総数15。15人いればいいわけだ。

そういえば、サヨの部屋はこっちだった。

別に行きたいわけじゃないが、一応見回る義務がある。

鍵がかけてあるはずだから、開くはずも無い。

「そ、そうよ……適当に見てさっさと帰るのよ……。鍵開けないつて、廊下からライト当てりや……。何をびびってんだか。たかが都市伝説じゃない！！ 怖くない怖くない……」

私は恐る恐るライトを当ててみた。

……………。

誰も居ない。外に人影が映っているだけだ。こんな時間に病院に忍び込むなんていい度胸じゃないか。

念のため、鍵が掛かっているかドアを引いたりして確認してみたが、全く動かなかった。

良かった。心から良かったと叫びたい。

明日、屋上で大声で叫びたい。

サヨの呪いの噂流した奴をぶっ殺す。

あずみは気付かなかった。8階の窓の外にどう考えても不審としか思えない人影のことを、なんの不思議もなく受け入れてしまっていたことに。

02 流れるにおかしい

* * *

「おはようございます、朝のお薬です」

看護師、飯田がにこやかに挨拶してきた。だが疲れた表情は隠しきれていない。飯田は持ってきた薬を芹沢に渡した。

芹沢は朝っぱらからわけのわからないことを言ってきた。しかもあれからどうやら芹沢は一睡もしていないらしい。

「看護師は薬に毒を混ぜて殺そうとしている。騙されるな」

私の方を睨むように芹沢が見てきた。私にそんなことを言われても、私は騙されているつもりは無い。

飯田が何処かへ行ってしまうのを待ったが、飯田は側で芹沢の行動を見守っていた。

「飲まないよ、天使が飲むなって言ってるもの。それ飲むと、体から火が出る！！ はらわたが引きずり出される！！ サタンが私を殺しに来るのに、そんなもの飲めるわけないでしょ！？」

芹沢の叫びを飯田は黙って頷きながら聞き、辛いんですねと声をかけた。

「何！？ わかってないくせに頷いて！！ 私の言ってることなんてどうせ信じてないでしょ！？ ふざけんな！！」

飯田は困ったように首をかしげた。

「薬飲まないと、苦しいままですよ」

「そうやって無理やり薬飲ませようとして！ 毒混ぜてるんでしょ！？ 人権侵害で訴えるぞ！！」

芹沢は渡された薬と水の入ったコップを壁に投げつけた。水が飛び散る。

人って一睡もできないと精神状態不安定になるものらしい。

「落ち着いてください、芹沢さん」

なだめる飯田を芹沢が蹴り飛ばした。

「落ちついてるわ！！ あんた、人のことなんだと思ってるのよ！
！ 頭の狂った女だと思ってるの！？」

飯田は完全に参ってしまっているようだ。多分今年看護師になつたばかりなんだろう。初めての深夜勤明けで、配薬こいつは完全に芹沢から信用されていない。まだ学生の延長という感じが強い。

飯田一人の手に負えられなくなったので、残りの夜勤看護師がすつ飛んできた。

三人がかりで芹沢をベッドに押さえつけ胸を抑制帯で抑制してから手首をベッドに縛りつけた。

「やめろー！！ はずせえー！！ サタンが来る！！ 呪われてい
るんだこの病棟は！！ お前達のせいで入ってくるんだ！！ 死に
たいのか！！ 私にやらせろ！！ 呪いを払ってやるから！！」

抑制が終了すると看護師たちは他の患者のところへ回ったり、業務に戻っていった。

「芹沢はお前を呪い殺そうとしている」

「そうなのかな……」

「あの女は鬼や悪霊を従えているんだ。こんな病棟、さつさと出よう。お前は病気じゃないのだ。薬だって飲む必要ないだろう」

さっきの一件からもう眠気が吹っ飛んでしまった。まだ朝の7時だったが、ピアノが弾きたくなった。声を聞いているとだんだん苛々してくる。はつきり言おう。うるさい。

防音のため、ピアノを弾いていても誰にも何も言われないところだけはこの病棟のいいことだと思う。

ピアノの音が聞こえてきた。誰かがピアノを弾いているんだ。

「……この曲知ってる。ストラヴィンスキーの、イ長調セレナード」
一度弾いたことがある。それにしても上手い。誰が弾いているのかわからないけど。

私はピアノの音が鳴るほうに惹かれるように歩いていった。誰もまだホールには出てきていない。静かな病棟の中でピアノが小さく鳴り響いているのは綺麗だった。

私はそのドアを静かに引いたのと、

「小夜さん!？」

と飯田が私を呼び止めるのはほとんど同時だった。それまで響いていたピアノの音も消えた。

「もう遅い……」

「え?」

中で誰かが囁くように言ったため、私は足を一步部屋に踏み出した。飯田は慌てて、私に駆け寄ってきた。

「駄目!!! 他の病室に入らないで下さい!!!」

飯田が私のパジャマを引っ張る。私は反射的に飯田の手を振り払ってしまった。この部屋にピアノなど影も形も無かった。カーテンの閉まった部屋では暗くて様子がわかりづらい。

「小夜さん!!! 早く部屋を出てください!!! ……この部屋!!!」
朝日が少しだけ差し込む。

私と飯田看護師はその場に立ち尽くしてしまった。

お互い、言葉が出てこなかった。

壁は爪で何度も引つ掻いたような、血筋が幾つもあつた。

血飛沫が白い壁を汚染している。

それに、落書きとしか思えないが、の中にSが書かれていた。

信じられないが壁ににじむように赤い文字が浮かび上がってきた。

「これで貴方は呪われました。一週間後、呪いによって爪を剥がれ、目をつぶされて殺されます。」

助かる方法はただ一つです。それは
「

03 発現ス

「……一週間以内にここから出て行くことです」

今の私には絶望的な言葉かもしれない。

一週間以内にここから出るのは無理だ。

一日目、病棟の壁に黒くて目玉くらいの大きさのしみができた。

あの後、私は何かに操られるように持っていたシャーペンで飯田のことを刺し、自分の目も抉り出そうとした。たかがシャーペンで刺しただけなのに、飯田の手は真赤になっていた。

私は看護師に取り押さえられ、ベッドに腕を縛りつけられた。何人もの看護師が私を取り囲む。セレネースとか聞きなれない言葉を言い合っている。一人が私の左腕を強くベッドに押さえつけ、一人が右手を押さえつけた。看護師が注射のAirを抜く。針先から珠が一、二粒零れ落ちる。体を抑えてつけられているとき、今まで無かったものを見つけた。突如浮かんでいた二つの黒い染み。それは目のようにどの位置にいても常に私を見ているようだった。目を閉じるとそれが徐々に近づいてくる気がして、私は瞬きせずにそれを見上げていた。

このまま眠ってしまったら、あれが襲い掛かってくるような気がした。看護師は私の思いなど無視して強制的に眠りにつかせようとしているのだ。看護師が悪魔に見えた。

「嫌……やめて!!」

私の小さな抵抗もむなしく、針が私の皮膚を傷つけた。液が体内

に注入されるのを感じながら、眠りについた。

うつうつしながら目を開けてみたら、看護師が点滴を交換していた。外はもう暗い。おそらく夕方か、夜なのだろう。つい半日くらい眠った程度だと思った。どれくらい眠っていたのか訊ねたら、三日だと答える。そんなに眠らされていたのか。体がだるい。気付いたら、ベッドに縛り付けられていた。

壁を見ると、染みが大きくなっていた。

丁度、私の顔と肩幅と、同じくらいだ。

そういえば、サヨの部屋に入ってからもう四日も経っていたのか。

久しぶりに起きた私は、看護師と一緒に部屋を出た。サヨの部屋に入ってから以来、一人では自由に歩けない。スタッフから危険行動があるため要注意というレッテルを貼られたようだ。

入り口の横を通るたび、ここから何とか出て行きたいという思いに駆られた。病気でない人間がここにいる理由なんてない。

ドアの前で立ち止まる背中を看護師が押す。自由が鉄の板一枚によって遮断される。

「私退院します……ここから出してください」

「小夜さん、先生が良いって言ったら退院ですからね」

看護師が小さな子に言い聞かせるように優しく言った。皆表面は優しいが、内心は患者の言うことを一々真に受けず聞き流している。

それがまた腹立たしい。

「病気じゃないですから……」

ドアを拳で強く叩いた。何度も何度も。看護師が慌てて私の腕を抑える。

「出してよ！！ どうして閉じ込めるのよ！！ 病気じゃないって言うてるでしょ！？ 人の話聞いてなかったの！？」

「小夜さん、静かな場所にいきましようか。少し落ち着きましよう」
看護師は私の肩に手を回し、私をピアノの部屋に連れて行った。
部屋に入った途端、落ち着いてきた自分が信じられない。

私は無心でピアノを弾いた。イ長調セレナード。あの時病棟に響いていたのと同じ曲だった。

その直後、インターホンが鳴った。

「来るぞ」

声が私に囁いた。

私はその言葉を聞かないように、ピアノに没頭した。

カメラに映っていたのは、顔が隠れるくらい長い黒髪の女だった。肩から大きなバッグを提げている。映像は白黒でよくわからないが、何かで全身が濡れているようだ。その女の通ったと思しき床のみ濡れている。

「はい、どちら様でしょう？ ご用件はなんでしょう？」

看護師がマニュアル通りの受け答えをする。

女は無言だった。もう一度インターホンが鳴る。

「はい？」

女はマイクの向こうではそぼそと答えた。

「……………あけて」

看護師は首をかしげた。もう一度女に問う。

「誰のご関係者ですか？」

「……………あけて」

女は繰り返した。意外と高い声で気味が悪い。同じ言葉しか返ってこないのですすがに看護師も気味が悪いと思った。

「ただいま面会時間ではありませんのでまた後日いらしてください」
意外と女はあっさり引き下がり、忽然とカメラの視界から姿を消した。あまりにも早く視界から消えたことを不審に思った看護師は、鍵を持ってナースステーションから出てきた。

「あ、私行きますよ。ご家族のかたです？」

「いいの、貴方は小夜さんと一緒にいて」

看護師は険しい表情だった。得体の知れない人物をこの病棟に入れるわけには行かない。だが放っておくと何かもつと嫌なことが起きる気がした。

看護師が鍵を刺した。

私はそれこそ嫌な予感がした。その扉を開けたらサヨが来る気がした。

「駄目！！ 開けちゃ駄目！！」

「小夜さん、何が不安です？」

看護師がなだめるように私の肩に手を置く。わかっていないくせに理解ある態度を示そうとするこいつらが苛々する。

看護師が扉を開けると、女はそこにいなかった。その代わり床が赤く濡れていた。もしかして、これは血だろうか。女は怪我をしていたのだろうか。看護師は不審に思い、デイスポーザブル手袋を装着してそこにしゃがみこんだ。

長い髪の毛の感触が背中に残った。看護師は自分の髪の毛ではないことを感じたが、体が何故か動かせず、上を見ることができな

った。

「殺しに来ました」

上からさっきの女の声が、看護師に囁いた。

看護師の悲鳴が病棟中に響き渡った。

04 面会

五日目の朝。目を開けて自分の目を疑った。

「また大きくなってる」

黒い染みがついに自分と同じ大きさになっていた。

ここまで大きな染みになると、さすがに病棟中でも騒ぎになっていた。皆病室に集まってきて、壁を見ながら声を潜めて話し合っている。

「随分汚れていますね……壁の張替えしたほうがいいんでしょうか？」

「気持ち悪いですね。アレ、人の形に見えませんか？」

「そうそう。私もそう思ったんです」

「いつからこんな染みができたんでしょうかね？ まさかサヨの呪いとか？」

看護師がくすくす笑いあう。いつからだって。もう何日も前からあるものじゃないか。気付かないような奴がよく看護師などやっていられるものだ。

「もうやめましょう、そんな話……」

飯田だ。最近姿を見かけなかったが、今日は日勤でいるらしい。飯田は等身大の大きな染みを青ざめた顔で見ている。

「私、あの部屋に入って以来、変なことが起こってるんです。足が痛くて、目を開けたいけど開けられなくて、朝起きたら足に齒形がついてたんです。夜になるとピアノの音が聞こえてくるし……」

看護師たちは笑い出した。

「足に齒型！？ 何で齒型なの！？」

「わ、笑い事じゃなくて……本当なんですよ。だから明後日はお休みにしてください、師長さん。一週間後にここから出なくちゃいけないんです！ 呪い殺されちゃうんです！」

飯田が必死にお願いしているのに、師長さんは笑って答えた。

「ちよつと厳しいですね。飯田さん、今週連続で三日休んでるから、勤務は予定通りでお願いしますよ」

「そんな……!!」

「少し疲れてるだけよ。相談ならいつでも乗ります」

だから今相談しているのに。可哀想な飯田。この世の終わりみたいな顔で、空を見つめていた。

「どう？ 小夜。病院にはもう慣れた？」

「まあね」

閉鎖された自由のない空間に慣らしておきたいとも言いたいか、母が面会早々かけてきた言葉だった。慣れたくない、こんな病棟。

母が面会に来たので、今は抑制解除されている。久しぶりに開放感を味わった。

入院して初めて面会に訪れた母。よほど後ろめたい想いがあるようだ。私からずっと視線をそらしている。ここに連れてきたことを後悔しているとも言いたいのか、私が好きだったりんごのタルトをもつてきてくれた。会話が途切れて沈黙になる。

「ねえ、欲しいものはある？ 売店で買ってきて来るよ」

「自由が欲しいよ、お母さん」

母は俯いてしまった。

娘がうつになったのは自分のせいと、自分自身を責めていることは知っていた。

母が父と別れたのはもう10年以上前のことだ。父は他に女を作って出て行ってしまった。誰よりも家族の絆を重んじてきた母にとって、大きな衝撃だったことだろう。私は母の側にいた。出て行った男のことなんて忘れて欲しかった。

私は今まで自分のことを女で一つで育て可愛がってくれた母のことが好きだ。それなのに、父の影を感じるような言動を私の中に垣間見た時、別人のように代わる。私のピアノ。父が習わせていたものだが、父の不倫相手がプロ級だったようだ。私がピアノを弾いていると、女を思い出すからやめると何度怒鳴られたことだろう。

ピアノ以外の取り得がないと思っていた私にとって、それは私の生を全部否定されたのと同じようなことだった。

それだけならまだ良かった。

私はピアノのことで喧嘩して、母にその時言われた言葉が一番ショックだった。母は泣き叫んでいた。声を震わせていた。

「お前の名前はあの女の名前と一緒になの。お前の名前を呼ぶだけで吐き気がするわ！！ 小夜なんて……あの男が小夜なんてつけるから……！！ 私の娘が穢れて……！！」

いつしか、私のことを否定し続ける声が生まれた。無価値、死んだほうがいいといってくる声。私はいつしか無気力になって、何もできなくなった。ピアノが弾けなくなり、食事が取れなくなり、眠れなくなった。

娘をこんな状態にしたのは私、母はそう思っている。

大正解だ。多分。

母をこんな状態にしたのは父だ。

父から家庭を忘れさせたのは、女だ。

だけど、心が弱かったのは私だ。

誰が悪いかなんて、わからないじゃないか。

話題を探すように周囲を目で追っていた母が呟いた。

「それにしても、何？ あの壁。染み？」

私が黙っていると、母は染みに近づいて触った。

「湿ってるわねー。配水管がもれてるんじゃないの？」

呑気なことを言ってぺたぺた触りまくっている。

「触らないほうがいい。そこには呪いが掛かっているんだ……。天使が言っていた。その呪いは悪魔のものだと。悪魔が、呪い殺そうとしている」

母は驚いて壁から遠のいた。

「芹沢さん……」

「悪魔に呪われたサヨ。サヨに呪われた小夜。小夜を守る……。あ……ま。悪魔を滅ぼす天使……。閉鎖……。空間……」

芹沢は一人で天井に向かってぶつぶつ呟いていた。多分守護天使と交信中なんだろう。

「助かる方法……。それは一つだ……。天使、そうか、天使!!」

ガンガンと何かに何かがぶつかる音がした。芹沢がベッドを揺らしているのだろう。

母は青ざめた顔で隣の病人を見ていた。

05 近付く

母が面会に来てくれたから、私はうとうとしていた。慌てて起きると、母はもう帰ったようで、そこにはいなかった。窓の外を見ると、外は厚い白い雲に覆われているのか、全く街の様子が見えない。自分がどれくらい眠ったのかわからないが、ほんの数時間、いや数分うとうとしていただけらしい。

起き上がると、点滴がついていないことに気付いた。看護師がはずしていったのだろう。私はベッドから足をたらし、壁にある黒い染みを見上げた。真っ白な壁に浮かぶ黒い染みは相変わらず等身大の大きさだ。ここから何かが飛び出したら、きっとそれは私を殺す何かに違いない。

廊下に出ると、全ての病室の扉は閉められていた。ナースステーションもブラインドが閉められ、中の様子はわからないようになっていた。

私は白い廊下を一人で歩いた。

いつも以上に静かだった。貧困妄想も、脅迫妄想も、被害妄想もない。奇怪な叫び声もしない。保護室で鉄格子を掴んで叫ぶ患者もいない。聞こえているのは私の鼓動と、ピアノの音が聞こえた。

また誰かが、あの時と同じ曲を弾いている。私はその音に惹かれるように、白い空間の中、音のする部屋に近づいていった。私以外にそこにいる者が気になり、私は僅かに開いた扉の隙間から中を覗いてみた。

赤い。

真赤な服を着た少女がピアノの前に座っていた。長い髪で顔が隠れている。一心不乱で恋人にあてた曲、小夜曲を弾く姿は狂気だった。

彼女は突然、ピアノを弾くのをやめた。

嫌な予感がして、私は思わず後退りした。それに、さっきから何かの生臭い匂いが鼻につく。この部屋に充滿している何かの匂いが、隙間から漏れている。

女はゆっくり私の方を向いた。

「あ……あ……」

髪が振り払われ、あらわになったその顔はとても見るに耐えないものだ。両目に二本の刃が突き立てられ、完全に潰されていた。血が涙の様に頬から垂れる。椅子の周りに真赤な水溜りができていた。足首が完全に切断され、赤いしずくが垂れていた。

鍵盤は赤く染まっていた。

赤い服だと思っていたが、それは血であることに気付いた。よく見ると彼女が着ているのは病衣だ。

ここまで出血したら普通死んでる。そして歩けないだろうし、立てないだろう。女は立ってくれた。そして歩いてくれた。お前はクラカ。

彼女はニヤーと笑い、扉に張り付いた。扉の隙間から右目の刃が飛び出る。

私は逃げた。本当はもっと早くから逃げたかった。

女はどこから取り出したんだか、二本の刃を持って追いかけてきた。アレだ。普通に目から抜いたんだろう。

追いつかれたら殺される。間違いなくあの刃で。現実味を帯びないような白い空間で、彼女だけは違った。彼女が走れば赤い道ができる。彼女は病院を汚染している異物だった。

私は出口まで逃げた。女の足を引きずる音が徐々に背後から近づいてくる。私は思いつきり叫びながら開かないドアを力いっぱい叩いた。

「開けて！！ 誰か開けて！！」

閉鎖病棟の扉が長らく入院していた患者の力で開くはずがなく、いくら押しても体当たりしても無駄だった。

私は全速力で走った。外は霧が掛かっているように白かった。この時間、屋上は開けっ放しになっている。屋上へ初めて入ったのがこんな時だとは思わなかった。

屋上には金網がしてあり、下には飛び降りれないようになっていた。大体、飛び降りるにしても何も見えない。飛び降りたら即死だこれ。

隣には病室があり、何故か知らないが病室に立てこもった。壁にへばり付く様に慎重にベッドに戻る。冷とした感覚が背中を伝った。いつも反対側に見えていた黒い染みがいつの間にか背後にあったのだ。

後ろの染みからは黒い手が伸びてきた。手が私の病衣の襟を掴み、壁の中に引きずり込んだ。壁を引っ掻く様な音がして、前を見たら女が二本の刃で壁を突き破ろうとしていた。

だけど、私の体は壁にのめり込み、女の怪力な様子が見えなくなる。

嫌だ、こんな最後は、嫌だ……。

* * *

六日目の朝。

鉄くさいような、生臭いようななんともいえない匂いが部屋中に充満していた。きついその香り私は覚醒し、耐え切れずナースコールを三回ぐらい押した。

看護師が行きます、とだけ答えて部屋にやってきた。

息が詰まりそうなくらいの悪臭に、看護師も思わずうめき声を上げる。

「今窓開けますね」

そういつて看護師が窓側のベッド、芹沢のベッドに近づいた。

「あ……あ……。嫌あー!!」

そこには、ベッドに縛り付けられたままの胴体しかなかったという。シーツは黒く変色していた。私のベッドの下にも、腕が落ちていたという。

芹沢が変死した。

芹沢だけが知っていたこともあつたはずだ。

芹沢はどう考えても自殺ではない。四肢断裂。足首だけ無く、両目も抉られている。しかし刃物を使った形跡は無く、どちらかといえば凄い力で何かかもぎり取ったような切断のされ方だという。どれだけの怪力か知らないが、私は抑制されていたし、返り血なども無い。一度は疑われたが、容疑をかけられる意味がわからない。

とにかく、この部屋は何かあるということ、私は部屋を移された。ナースステーションの前に。

「芹沢さんどう考えてもアレはサヨの呪いで……」

「でもどうして？ 呪われたのって、一番ベッドの人じゃないの？」

「同じ名前だから助かったんじゃないの？ まさか、あの人サヨだったって……」

「サヨって、不倫してたんでしょ？ まだ10代なのに、30代の妻子もちの人とさ……。別れてうつになっちゃったって。それで目を抉られて、足を切断されて、爪まで剥がされたって噂じゃない……」

……

暇人。そんな噂ばかりして。

今度の部屋には黒い染みは無かった。白い空間に、今度は一人だった。

医師と面会室で話して、今度は落ち着いた環境で治療できるよ、
と言われた。今日退院できますかと聞いたら、それは無理だねと簡
単にあしらわれた。

「サヨが私を殺しに来るんです。夢で散々な目にありました。今日
までに退院しないと私、殺されます」

「そうだね、怖んだね。私にはわからないけど、実際そんなことが
あったらどんなに怖いだろうね」

信じてくれなかった。じゃお前が代わってくれと言いたい。

「薬、出しておくからちゃんと飲んで。そういつの消えたら退院だ
から」

そうか。私は死亡退院しないとだめらしい。私は一人で笑ってし
まった。

06 其ノ事実

* * *

「今日の勉強会、貴方も来なさい、飯田さん」

「ええ！？ どうしてですかー？ 私、今日は早く帰ろうと思ってたのに」

突然言われたことに、飯田は動揺していた。しかも今日は夜勤だ。ぎりぎりの0：30に来ればいい、一度家に帰ってここから離れようと思っていたのに。

0：00までに外に出ないと呪い殺されると飯田は本気で思っていた。今ならわかる、患者達の妄想が。怖いのに誰にもわかってもらえない孤独が。昨日は変な夢は見るし、芹沢は殺されるし。こんな時まで勉強なんて信じられなかった。

「いい！？ 6時からだからね。6時になったら病棟の鍵閉めるよ」「はい……」

結局参加することになったが、本当に行きたくない。飯田の今日の受け持ちは小夜だ。絶対よくないことが起こる。わかっている。何で今日に限って勉強会があつてしかも深夜入りなのだろう。時計を見るともう5時半だ。あと30分しかない。

先輩看護師はさつさと自分の業務を終わらせて次々と鞆を持って勉強会へ行ってしまう。自分の要領の悪さに苛立ちながら、飯田も何とか6時までにはここを出ようと頑張っていた。

こんな時に限って、誰か面会に来たりする。今日は面会にこられても一般人立ち入り禁止で入れない。変死する患者は出てくるし、本当にこんな病棟就職するんじゃないかった。

先輩看護師は小夜がサヨだったりしてとか言ってくるし。そんなわけ無いだろう、どれだけ怪力女なんだ。

インターホンが鳴った。ナースステーションは空だった。一番近

い飯田がとんでいく。

「何よこれ……ふざけないでよ」

カメラには大きく目が写っていた。誰かの悪戯としか思えない。

飯田は苛々していた。早く勉強会に行かなければならない。こんな悪戯に付き合っていない。

「どなたか存じませんが……お引取り願えますか!？」

笑い声がインターホンから聞こえてきた。馬鹿にしているとしか思えない。時計を見ると、もう6時5分前だった。勉強会に間に合わない。

血が出るような恋をして見ませんか？ ドキドキしちゃうー あははん

笑っちゃうくらい セレナード 上手すぎ

目から飛び出た刃物（両目）

危険すぎてドキドキ（刺さった）

足は血まみれ（足首ない 血だらけ）

追いかけてごっこはスキカイ（主奇怪）!？

どこから出したその刃物、もしかしてお前の目？

そうさそうさ逃げ惑えー 壁から出てくる悪魔さん

私を闇へ引きずり込むのさ 貴方の口から何が出る？

閉鎖空間で遊ぶのは危険すぎ 怖さいっぱい夢いっぱい

退院 退院、今日は無理

死ねばよかったのに

「何よその歌は……!! ふざけないでよ!!」

飯田は思わずカメラのコンセントを抜いた。

「看護師さん」

小夜が真っ青な顔で入ってきた。

「ちょ、勝手に入ってきてきちゃだめですよ」

「気持悪いんです。薬、もらえませんか？」

今にも吐きそうに口に手を当て嗚咽する。飯田は背中を小夜の背中をさすった。小夜の背中中は冷や汗でぐっしり濡れていた。それに、何か手形のようなものが首についているのは気のせいだろうか。小夜は珍しく自分から話し出した。気持悪そうだが、やけに饒舌だ。「私のお母さんは……弱い人だったんです。父の不倫が発覚してから、私のことも放置で。自分のことも何もできない状態で、パニックに陥ってました。父は私が生まれる前から不倫してたみたいなんですけど。しかもその不倫相手、まだ10代だったそうなんです。今の私と同じくらいです。長い黒髪で、父は私にも髪を伸ばせとうるさく言ってきた……」

「大丈夫……？」

……その話、どこかで聞いたことがある。

「う、ヴえー……」

小夜の口から、黒い吐物が出てきた。小夜も涙目で、自分の口から出てくるものを押さえられなかった。

長く細い黒く光ったものがハラハラおちる。

「髪の毛……こんなに沢山？」

「母は、サヨという女性を許していませんでした。私の名前も、屈辱の証でしかなかった。わかったんです。ここに来て。母はサヨを殺してしまうほど憎んでいたって。昨日、夢で見たんです。あの壁の染みは……憎しみでした」

「水飲んで、ほら」

時計を見たら、まだ6時5分前だった。おかしい。さつきと全然変わっていない。

「不倫相手のサヨは、父と別れてから躁鬱病になったんです。それだけショックだった。そして入院しました」

「……やめてよ」

「采明病院8階、精神科病棟。やっとわかりました。私の母が悪魔です。悪魔の呪いは、母のことでした。見て下さい、この髪の毛……私の体内には、何があるんでしょうね？ サヨは私のこと相当怨

んでいるみたいです。関係ないのにね。悪魔に呪い殺されたサヨは、その娘の私を殺さないと気がすまないらしい」

「じゃあ、どうして私まで……だって、私……」

「道ずれは多いほうが寂しくないでしょ？」

そんな理由で……そんな理由で死にたくない。

* * *

サヨを殺したのは確かに呪いだ。それがまさか母の呪いだとな誰が想像するだろう。母の呪いのおかげで、私がサヨに呪い殺されることになるとは皮肉以外の何者でもない。

小夜曲はサヨが恋人に当てた曲だった。つまり、私の父だ。足をつぶされ、目もつぶされた。爪も剥がされ、ピアノを弾けなくさせた。

サヨに嫉妬するあまり、生霊になって殺してしまった。母は弱い女だ。プライドばかり高くて、男に逃げられて。体裁が悪くてしょうがなかった。

家庭を崩壊させる原因になったサヨがよほど憎かったのだろう。

「そつえば、勉強会はいいんですか？」

「勉強会なんていつまで経っても始まらないと思う」

飯田は時計を指した。時計は変わらず6時5分前だった。

飯田は震えながら扉に鍵を刺した。カメラのない、3つの出入り口のうち一つだ。

「どうして……？」

「開かないんですか？」

飯田は走って反対側の出入り口に急いだ。鍵を回しても、鍵の開く音はするが扉が開かない。押しても引いても、叩いても開かない。「どうして開かないのよ!!」

「私達……閉じ込められたんですね」

私は冷静に窓の外を指差した。

窓の外は白い霧が立ち込めていた。

冷静になって考えてみれば、閉じ込められるなんて馬鹿な話、しかも職員が閉じ込められるなどあるはずが無かった。鍵は刺さるが開かず、飯田はおろおろするばかりだ。役に立たないやつ。だけど仕方ない。私の体内から吐き出された髪の毛の束は唾液で湿っているし、気持ち悪いし、次に何が起ころうとも何かもう驚かない気がする。大体、他の患者はどうなるんだ。私と飯田が閉じ込められるなら、他の患者だって同じはずだ。私のほかに14人も患者がいる。それ全部がここに閉じ込められたとも言うのか？

私の思いを知ってかしらずか、飯田は他の部屋の扉を片っ端から開け始めた。

飯田は頬を少し赤らめて私を呼んだ。一番奥の病室に誰かいたらしい。私は飯田に駆け寄った。閉じ込められているのが自分達二人だけで無いことがわかった。ただけ心強い気がした。

「鈴木さん？」

飯田が恐る恐るベッドに横たわる患者の名前を呼んだ。患者は振り向かない。

「大丈夫ですか？　鈴木さん！？」

飯田が鈴木さんの肩を揺すった。

「どうして私を外に出してくれないの？　あの人が私を殺しに来るって言うてるじゃない……」

鈴木さんは両目が抉られていた。飯田も私も声にならない悲鳴を上げた。私達の目の前で鈴木さんは黒い髪の毛を大量に吐いた。飯田が泣き叫ぶ。

「もう嫌！！　こんな病棟、もう嫌！」

泣いている飯田を引きずって私は逃げるように病室から出た。悪魔の呪いだかサヨの呪いだか知らないが、もうこんな病棟、嫌なのは私も一緒だ。母親を怨みたい。

「ちょっと、しっかり歩いてください。看護師でしょ」

「無理です……腰が抜けました」

私は舌打ちした。これで看護師なんだから驚きだ。患者に助けられる看護師なんて駄目だろう。一応私は入院患者でどう考えても飯田より体力ないのだから、しっかりして欲しい。

……何か嫌な予感がする。こう、何かに囲まれているような、追いつまれているような。

私はチラッと後ろを振り返った。

見なきゃ良かったと後悔したところでもう遅い。

いつの間にか、長い廊下の反対側に黒い影が立っていた。赤い服を着て、黒い髪を垂らしている。両手には刃、足首が無いのに立っている。

彼女はゆっくりゆっくり、私達に近づいてくる。張り付いた笑みのまま。無理に笑っているわけじゃなくて、本気で楽しそうにキモく笑っている。

「来ないで……」

はつきり拒絶の言葉を吐いたが、彼女は聞いていないようだ。女は口の端をあげた。

笑った顔も不気味だ。

飯田はその場にへたり込んでまた泣き出してしまった。私は舌打ちしながら飯田を引きずって走った。死にたくなかったら自分で歩いて欲しい。どこに逃げても同じだった。扉は全部閉まっている。叩いても蹴っても全く開かない。

女が通るたび白い廊下が赤く汚されていく。

「誰かここから出して!!」

開かないとわかっていながら飯田がエレベーターが向こう側にあるドアを叩いた。彼女は身をもって今知っているだろう。精神科病棟で、行動制限されて閉鎖されている空間の恐ろしさを。私達に逃げ道はないし、選択肢は無い。

「鍵を貸してください。ただ叩いたって開くはず無いですから」

飯田から鍵を奪うと開かないとわかっていながらも鍵を回した。私の言葉を聞いていなかったのか、飯田は良くわからない叫びを上げながら扉を叩いていた。

だから扉が簡単に開いてしまった時、飯田はフギヤッと声を上げて向こう側に突っ伏した。

私達は意外性に戸惑いながらもこの病棟から脱出した。私は扉からそつと病棟の中を覗いたが、女はまだ来ていない。足首がないぶん、遅いのだろう。

「今のうちです、早くエレベーターに乗ってください!!」

「おかしいですよ……こんなあつさり逃げられるわけじゃないじゃない!! 大体、私達閉じ込められたんじゃないの!？」

エレベーターはちゃんと動いていた。運の悪いことに1階から8階まで上がってくる。ちんたらちんたら上がってくるエレベーターと動揺して泣く飯田に苛々していた。

「何も考えなくて大丈夫です、考えるところなことありませんよ飯田さん」

確かに意味不明なことが多すぎるが考えるとそれが実現しそうで怖い。エレベーターの扉が開き、へたり込む飯田の背中を押した。エレベーターに乗るなり、飯田が上ずった声を上げる。

「あ……、う、上……」

「はい、下に行きますよ」

「そうじゃなくて……」

飯田の顔は青ざめていた。私の頬に、ぬるつとした生暖かいしずくのようなものが落ちてきた。私はなんとなく天井を見上げた。

そして、飯田の言いたかったことにやっと気付いた。

私の真上、天井の隅に這い蹲るように彼女がいた。彼女は笑っていた。両目から血が流れ落ちる。グロテスクにも程がある。

「閉鎖空間で死ね」

意味不明な言葉が聞こえ、ついでに耳障りな高笑いも聞こえてきた。私は急いでエレベーターに乗り込み、何度も何度も「閉」のボタ

ンを押した。

ドアが閉まる瞬間、女が天井から降りてきた。彼女はにたと笑ってゆっくり近寄ってきた。もう終わりかと思った。そこに現れたのは私の部屋にずっとあった等身大の黒い染みだった。

正確に言えば黒い染みから出たと思われる異形の顔をした私の母親だった。目がいつてる。母をここまで変貌させた父の不倫相手、サヨは凄いな。黒い染みは女の手を掴み、壁に引きずり込んでいった。

エレベーターの中で私も飯田もお互い無意識のうちに抱き合っていた。怖い、怖すぎる。

。これでおしまいなのか？こんなに簡単に終わるのか。悪魔の呪いでも何でもいい、私を助けてくれるなら守ってくれ。

ガタンッ

何かが切れる音が鉄板の上のほうでした。エレベーターの電気がちかちかときいたり消えたりしはじめる。もしかして、こんな中途半端な場所で故障か。まだ6階だ。

「いや、いやいやいや……！！」

飯田がとりあえず私にしがみついてきた。私だつてどこかにしがみつきたいんだけど、仕方ないから壁に寄りかかる。

エレベーターは、私達二人を乗せたまま超無重力状態になった。

突然開放感が襲ってきた。飯田が気絶して私から離れたのだった。一気に急落下し始めたのだ。私達は顔や腕、体のあちこちを壁にぶつけまくった。体が浮きそうで内臓がひっくり返りそうだった。遊園地のアトラクションは好きだが実際にこんなことあったら死ぬ頭潰れてミニトマトだ。

このまま終わるかと思うと、不思議だ、汗が出てきた。

このまま落ちていくと思っていた。

グーーン

なのにエレベーターは見れば上がっている。しかも8階まで。この病院は8階までのはずなのに、8階まで上ってもとまらなかった。

そしてエレベーターは次の階、無いはずの9階で止まり、扉が開いた。飯田はエレベーターの中で気絶したままだった。

開いた扉の先には、母がいた。
そして、サヨもいた。

二人とも、普通の顔だった。サヨの目に刃なんて刺さっていないし、血も流れていない。

外からセレナードが聞こえてきた。

母が優しい声で囁いた。

「小夜、こっちにおいで」

私はエレベーターから降りた。私が降りるとエレベーターは待っていたかのようにまたドアを閉め、落下していった。

「ごめんね小夜。私、貴方を怨むなんて見当違いだったわ」

「お母さん？」

母が強い力で私を抱きしめてきた。

「本当に怨むべきなのはあの人なのよ……確かにサヨを殺したいほど憎かったわ。あの時、サヨがあの人を見ることができないように目を潰し、あの人のためにピアノが弾けないように爪を剥ぎ、あの人のもとへいかれないように、足を切断したの。それから……だから私は苦しくて苦しくて……」

「痛いよ、お母さん……」

「サヨもあの人に未来を奪われたの。許せないでしょう？」

「あの人に関わったのも全部、消さなくっちゃあ、気がすまないのよ」

母が腕に一段と力を込めてきた。

「貴方を精神的に追い詰めて、精神科に入院させて正解だったわ。サヨの時と同じようにね。だって、閉鎖病棟で起こったことなんて公表されない。閉鎖空間で起こることなんて誰にもわからないじゃない？ 貴方、生まれた時からずっと私に騙されてたの……。貴方を愛しいと思ったことなんて無かった。ねえ、小夜。私はあの人に感謝しているの。貴方に小夜という名前を付けたこと。だって躊躇なく、殺せるじゃない？」

だとしたら、私は閉鎖された空間で殺されるために入院してきて、母親と父親の不倫相手に呪い殺されるのか。これまでずっと慕ってきた母親に殺されるのか。

母親に守ってもらうことはあっても、殺されることは考えていなかった。芹沢、お前の言っていたことは全部違っていた。

私は呪いで殺されるんじゃない。人の欲で、恨みで、本能により殺されるんだ。母に殺されるんじゃない。母の思いに殺されるんだ。そう思わないと、泣きそうだった。

まあ、精神科に入院している患者の言動を信じればそれこそ馬鹿だけだ。

母は入院のとき浮かべていた笑みを浮かべた。

「もう、飯田さんたら、勉強会にも来ないでこんなところで寝て！」

エレベーターで病棟へ戻ろうとした看護師が飯田を発見し、飯田はそのままエレベーターの外へ引きずり出された。看護師は飯田の頭部や顔面、腕などが打身のように青く腫れているのに気がつき驚

いた。そして何故かどのボタンを押しても反応しないエレベーターを不審に思った。

「エレベーターが原因不明の故障のため、しばらくは階段を使ってください。」

正直、8階勤務の職員にとってはきついお達しだった。

病院の階段は、窓がついていて外が見えるようになっていた。8階まで来ると外の眺めは最高だった。少々怖いが、上ったという達成感はある。

看護師たちはそろそろと、外の眺めを見ながら階段を上っていった。

そして見てはいけないうようなものを見た。

病衣を着た患者が一名、空から降ってきたのだ。首はありえない方向に曲がっているし、顔こっち向いてるし、目は合うしで大騒ぎだった。

死亡した患者の名前は小池小夜。今日で丁度一週間入院している患者だった。どうやったのかわからないが、上から飛び降りて自殺したようだ。華奢な体が地面に叩きつけられ、体がつぶれ鮮血が周囲に飛んだ。

翌日の新聞に、男性が原因、死因不明の死を遂げ、部屋に「閉鎖空間で死ぬ」と書かれた謎のメッセージが残されていたと大きく報道された。出血は大量にあったが外傷は特に無かった。出血部位は特定できず。彼は音楽プロデューサーで、昔将来有望視されていたサヨというピアニストと不倫していたことが発覚している。

彼の元妻は数日前に自殺していた。

閉鎖された病棟では、今日もサヨがセレナードを弾いて、自分の

部屋に引き込もつとしているという。

《おわり》

07（後書き）

参加表明をしてから何も考えずにここまでできてしまいました。精神科病棟は閉鎖病棟が多くて、ここに閉じ込められて生活したらどんなだろうと思いつながら書いてみた作品でした。実際、精神科の患者さん達は皆健康的な面もあり、ドラマに出てくるような方々ばかりではありません。

そして患者さんにとっては妄想も全て現実にあることなので、悪魔に殺されるとか、そういうのってふざけているように感じますが、本人にとっては本当に怖いことだとも思います。

これは果たしてホラーといえるのかどうか不明な点が沢山あり、内容も意味不明で文章もただだらだらと長くなってしまい、本当に申し訳ないです。

呪いって、人の感情そのものだと思うのですよ。

あーなんか良くわからなくなってきたのでこの辺で。

ホラーって書くの疲れました。はい。

初めてだったので楽しかった（？）です。

感想もらえたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6718e/>

閉鎖空間

2010年10月8日12時18分発行